

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0472400266		
法人名	社会福祉法人 紀心会		
事業所名	グループホーム メサイア	ユニット名:イースト	
所在地	宮城県亘理郡山元町山寺字堤山8-3		
自己評価作成日	令和3年2月2日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護・福祉サービス非営利団体ネットワークみやぎ		
所在地	宮城県仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台5階		
訪問調査日	2021年3月3日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「全ての行動には意味がある」「プライバシーの保護と尊厳の確保に努める」「焦らず、急がず、共に過ごす時間を大切に」という考えのもと、利用者様一人ひとりが生活の中で役割や生きがいをもち、自己決定を可能にしたその人らしい生活を送って頂けるようチームケアで実践している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

国道6号線から少し離れた場所にある洋風の平屋建て2ユニットのホームである。ホームの運営法人は「社会福祉法人 紀心会」で、平田外科医院や老人保健施設を運営する「医療法人 育成会」とのグループ法人であり、施設は同じ敷地に建てられ、介護と医療がお互いにタイアップして運営されている。「認知症の高齢者が自宅と変わらない生活が送れるようにすること」を、ホームの役割と位置づけ取り組んでいる。認知症の人が抱える、不安や混乱、そしてそこから生まれる行動「すべての行動には意味がある」として思いを把握しながら、職員はゆっくり見守り「焦らず、急がず」を心掛け、根気強く接し支援に努めている。利用者にとって、いかに食事が大切であることを意識し、野菜を重点に肉・魚とのバランスを考えたホーム独自のメニューを作成している。また、職員の拘りもあってメインのメニューを含め主食・主菜・副菜を手作りで提供している。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています。 (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている。 (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果（事業所名 グループホームメサイア ）「ユニット名 イースト 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入居者様の思いを探り安心できる生活を送れるよう職員は同じ方向性でケアに当たっている	「入居者の言葉に耳を傾ける」「入居者が地域との関わりを閉ざさぬように」としたホーム理念を掲げてケアに生かしている。理念はケアに迷った際の道しるべと位置づけ、職員は入居者に寄り添う気持ち・思いをくみとることを念頭に、日々取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により閉鎖的な環境での生活となっている	コロナ禍以前はボランティアを受入れ、地域との交流も図っていたが、現在はこれらを自粛し参加も中止している。入居者が、ほぼ山元町在住であり、地元住民と常に繋がりが保たれ継続できるよう考慮し取り組んでいる。現在は感染予防を徹底し、散歩などの際に地域住民と挨拶を交わす程度である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍により閉鎖的な環境での生活となっている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により開催できず	会議メンバーは家族、行政区長、町の福祉課職員、地域包括職員で構成されている。コロナ禍以前はホームからの行事や事故報告を行い、意見交換をしていた。以前は、入居者と一緒におやつを食べ、ホームの理解を深める取組みも行っていった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターより受け入れの相談、利用者家族からの御意見があった際連絡は受け対応している	町職員、地域包括職員が運営推進会議に参加しており、日常的に情報交換が図られている。地域包括支援センターとは入居者を取り巻く環境について相談も行っている。現在は会議を中止しているが、2021年度からは書面での報告で再開する予定である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関施錠は基本しないで対応しているが猛暑時入居者様が外に出てしまい行方がわからなくなったケースがあり以来ポーチは閉鎖している	身体拘束の事例はないが、不適切なケアに繋がる状況が見られ、検討した。身体拘束についての学習会を実施する目標を掲げ、取り組んでいるがコロナ禍で実現できていない。	身体拘束をしないケアのための検討委員会を充実させ、学習会が開催されることを希望する。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員のストレスや履き違えた意識により方向性を間違えている時は都度指導している	虐待の事例はないが、グレーゾーンにあたるケアが見られ、検討したこともある。管理者はどんな行為が虐待にあたるのか、具体的な例をあげての学習の場の必要性を感じている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度利用の入居者も受け入れはしたが難題多く今後の受け入れも慎重にならざるを得ない		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は十分な説明をおこない不明点は再度たずねがあったりその都度説明し対応している		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族とは定期連絡の際に情報を共有し意見を聞き上司や他職員との連携し話あっている	家族と面談を行った際や電話等で、意見・要望を聞いている。家族からの意見は連絡ノートを通じ、職員ミーティングの際に全職員で情報共有している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議にて意見を出し概ね聞き入れてくれているので 働きやすい環境ではある	職員はミーティングの際に、日々のケアの中から生まれる問題、気づき、提案を出し合っけて検討しケアの質の向上に繋げている。管理者はその都度、職員が抱えてる問題や悩みについて必要に応じて答えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与体系については見直しがあり職員のモチベーションUPに大きく繋がった		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修については実施できなかったが職員の個々の教育は適時行っていた		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	コロナ禍により行えず	コロナ禍のため、他の事業所との交流の機会ができなくなっている。以前の交流では、人材不足の中での職員の勤務体制作りなどを学んだ。法人内の他事業所とは、事例発表学習会などで交流を続け、事業所の運営改善に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の実態調査で把握し担当職員により入居後の生活が安心して送れるようフォローしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が心配なことの主としては入居日の本人の精神面のサポートである、入居前の面談にてアドバイスや支援方法を決めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	十分な聞き取りや情報の把握に努め本人に合った施設がどうか？判断し他事業所の紹介も含めすすめている		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は業務的にならず共に過ごす時間も大事にしている おやつや食事の際は職員も一緒にを維持		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人のケアについて家族には情報を共有し共にどうしたらいいか？を話し合い家族の意見を尊重している		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な限り本人の希望があれば実現出来るよう努力している	コロナ禍により面会を制限してきたが、12月より制限を緩和し、感染対策を徹底し短時間での面会を再開している。面会等で入居者の表情が明るく良くなり、記憶が蘇って来た状況を踏まえ、馴染みの人との関係継続の必要性の大切さを再認識し、状況をみながら支援継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士のかかわりは基本職員主導でおこなわずトラブル時のみ対応している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族からの相談があればアドバイスなどに応じている		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意思に添えるよう努めているが家族関係もあり添えない時もある代わりとなる対応法は適時考えている	「入居者の言葉に耳を傾ける」と掲げているホーム理念を実現すべく、入居者の声・つぶやき等を職員が丹念に「ケア記録」に記録している。得た情報を職員間で共有し、想いの把握に努め、入居者に寄り添った支援に繋げている。「急がず、焦らず」入居者の声を聴いている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の聞き取りで入居後に自宅との違和感を最小限に出来るよう努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別記録に記入し問題となっていることを見極めフォローしている		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティングなどで職員が意見を出し合い過去の介護事例と照らし合わせたりしている	入居者の日々のケア等を記録した「ケース記録」や家族からの意見を踏まえ、担当職員が中心となって介護計画を作成している。定期的にモニタリングを行い、介護計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録の簡素化を推進しているが必要な事項はきちんと記入するようにしている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	可能な限りの柔軟対応は心掛けているがコロナ禍や職員数の不足によりできない場合もある		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者自身があまり積極的な活用を望んでいない 希望される方には対応していく		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医が平田外科ではない方においては体調不良時の対応がスムーズにいかず職員も対応に不安を感じている今後の課題である	ほとんどの入居者が協力医をかかりつけ医としている。日々の健康管理は職員が行っている。かかりつけ医とは、24時間連絡が取れる体制が整備されている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は在籍していない		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時はADL低下の心配もあるがまずは病状の改善を待つ、退院許可が出れば即時対応している		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化の線引きを明確にしており家族には説明している	グループホームにおいて看取りを行わない、という方針を定めている。ホームに入居の際に、家族へ説明し理解を得ている。重度化し終末期を迎えた時には、グループ法人が運営する老人保健施設や、協力医療機関と連携しながら対応する体制が構築されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	行っていない		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	コロナ禍により簡素化ではあるが訓練は行った	ハザードマップを事務所に掲示し、職員はその状況を認識し災害に備えている。夜間想定避難訓練も実施しており、夜間帯の職員体制が2ユニット、2人だけのため、利用者が避難した後の待機時の見守りを近隣住民に依頼している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(16)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員と入居者は馴染みの関係になっているが時折配慮に欠けた対応や声掛けがでてしまっている	入居者の尊厳を確保することを、ホームのケアの際の重点項目に位置付け、日常支援の中で、全職員に意識付けを高めている。入居者とは敬語で接し、目線や距離の取り方等にも配慮した支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段自己決定できる方は少ない為そういった思いを出してくれた時は大いに尊重してあげようとしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	積極的な活動よりはのんびり干渉をされない過ごし方を好む方が多いので 雰囲気づくりは気をつけている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ヘアスタイルなどは施設まかせではなく本人に合ったスタイルを提案している 就寝前のお肌の手入れをする方もいる。髭剃りは職員サポートで随時行っている		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	仕事の効率上から準備は一緒に行えていない	職員のこだわりにより、メニューはホーム独自で作成し、主食をはじめ主菜・副菜を手作りで提供している。入居者の好みや季節を感じてもらえるような旬の食材、肉・魚が続かないようバランスを考慮し野菜を多く取り入れたメニューになっている。入居者の状態に合わせてミキサー食や刻み食にも対応している。人気メニューはカレーである。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	提供量が多めになっており体重増加の方が増えた為提供量は注意している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは抵抗が強い方もいるが職員介助で出来る方に関しては毎日行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	定時のトイレ声掛けは行っているが過剰な誘導は控えている	排泄チェック表を活用し、排泄パターンを把握している。一人ひとりの排泄のサインを見逃さないように努め、その人に合わせた支援を行っている。自立を促すためにも過度な声掛けをしないようにしている。排泄用品もその人の状態に合わせて使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の方が多いため水分の積極的な摂取は行っているが下剤に頼ることが多い		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	職員不足により入浴のタイミングが施設側の都合となっている。ただ、週サイクルで定期的には入れる努力はしている	入浴は入居者の希望を聞きながら、週2回から3回、15時から18時頃と遅めの時間帯で支援している。入浴拒否がある場合は、原因を探り部屋を温めるなど、入浴環境を整えて声掛けを工夫し入浴に繋がるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食後休まれる方が多い。夕食後はご自分で寝るタイミングが決める方は尊重している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬については適時把握し主治医にアドバイス等求めている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	感情のぶつかり合いもみられるが安全に配慮し職員はそっと見守りしている。天気の良い日は外にでて気分転換を図っている		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自ら希望される方はいないが、コロナ禍が落ち着けば、外出の機会を設けたい	コロナ禍以前は、年間外出計画に基づいて出掛けていた。現在は感染予防を徹底し、近所を外気浴しながら散歩したり、その日の状況を見ながら支援している。自宅に戻ることを希望する入居者もいる。気分転換を兼ねてドライブを行っている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	財布の中に札が入っていないと不安な方もあり家族了承のもと所持している 職員にお札を渡したりする時は 後でそっと戻している		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば対応したい		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不要な音、光の調節は心がけ静かな空間の提供を心掛けている テレビや音楽は適切な利用にとどめている	リビングは静かな空間になるよう心掛けている。みんなで楽しく過ごす場面と、一人静かに過ごしたい時に合わせられるよう、それぞれ場所を設けている。入居者から希望を聞いて、模様替えをし気分転換を図っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自ら過ごす場所を決めれる方がほとんどなのは嬉しいが気の合わない方同士になる場合もあるその際は干渉せず見守りだけするようにしている		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭で使用していたものなどを持ち込みして頂いている。	エアコン、ベッド、洗面台、チェストを備え付けている。居室のレイアウトは、入居時、ファミリー面談後や介護度が上がった時など、入居者の動線に配慮し、家族と話し合い決めている。自分の部屋らしくするため入居者の声を大切にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に生活できるよう定期的に居室やフロア内のレイアウトはチェックし転倒予防につとめている		

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0472400266		
法人名	社会福祉法人 紀心会		
事業所名	グループホーム メサイア	ユニット名:ウエスト	
所在地	宮城県亘理郡山元町山寺字堤山8-3		
自己評価作成日	令和3年2月2日	評価結果市町村受理日	

## ※事業所の基本情報(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護・福祉サービス非営利団体ネットワークみやぎ		
所在地	宮城県仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台5階		
訪問調査日	2021年3月3日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「全ての行動には意味がある」「プライバシーの保護と尊厳の確保に努める」「焦らず、急がず、共に過ごす時間を大切に」という考えのもと、利用者様一人ひとりが生活の中で役割や生きがいを持ち、自己決定を可能にしたその人らしい生活を送って頂けるようチームケアで実践している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

国道6号線から少し離れた場所にある洋風の平屋建て2ユニットのホームである。ホームの運営法人は「社会福祉法人 紀心会」で、平田外科医院や老人保健施設を運営する「医療法人 育成会」とのグループ法人であり、施設は同じ敷地に建てられ、介護と医療がお互いにタイアップして運営されている。「認知症の高齢者が自宅と変わらない生活が送れるようにすること」を、ホームの役割と位置づけで取り組んでいる。認知症の人が抱える、不安や混乱、そしてそこから生まれる行動「すべての行動には意味がある」として思いを把握しながら、職員はゆっくり見守り「焦らず、急がず」を心掛け、根気強く接し支援に努めている。利用者にとって、いかに食事が大切であるかを意識し、野菜を重点に肉・魚とのバランスを考えたホーム独自のメニューを作成している。また、職員の拘りもあってメインのメニューを含め主食・主菜・副菜を手作りで提供している。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています。 (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。 (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている。 (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果（事業所名 グループホームメサイア ）「ユニット名 ウエスト 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を頭で覚えるのではなく心に刻み理念を実践につなげている。ケアに迷ったときは道しるべとして理念を見つめ直すことも必要としており常に利用者にとって一番良い方向を選ぶようにしている。	「入居者の言葉に耳を傾ける」「入居者が地域との関わりを閉ざさぬように」としたホーム理念を掲げてケアに生かしている。理念はケアに迷った際の道しるべと位置づけ、職員は入居者に寄り添う気持ち・思いをくみとることを念頭に、日々取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在、コロナ禍の影響で地域とのつきあいはできない状況になっている。	コロナ禍以前はボランティアを受入れ、地域との交流も図っていたが、現在はこれらを自粛し参加も中止している。入居者が、ほぼ山元町在住であり、地元住民と常に繋がりが保たれ継続できるよう考慮し取り組んでいる。現在は感染予防を徹底し、散歩などの際に地域住民と挨拶を交わす程度である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護認定審査会に出席している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回の会議の定着化を目標としているがコロナ禍の影響により今年度の運営推進会議は実施できていない。	会議メンバーは家族、行政区長、町の福祉課職員、地域包括職員で構成されている。コロナ禍以前はホームからの行事や事故報告を行い、意見交換をしていた。以前は、入居者と一緒におやつを食べ、ホームの理解を深める取組みも行っていった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	居室の待機状況や空き状況の報告、入居申し込みの案内の支援をしてくださっている。	町職員、地域包括職員が運営推進会議に参加しており、日常的に情報交換が図られている。地域包括支援センターとは入居者を取り巻く環境について相談も行っている。現在は会議を中止しているが、2021年度からは書面での報告で再開する予定である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	防犯対策のため夜間帯のみ施錠しているが日中は自由に外出して頂いている。安全面からやむを得ない場合、センサーやモニターなどを実施する事前に家族の同意を得て一時的なことから継続的にならないように努めている。	身体拘束の事例はないが、不適切なケアに繋がる状況が見られ、検討した。身体拘束についての学習会を実施する目標を掲げ、取り組んでいるがコロナ禍で実現できていない。	身体拘束をしないケアのための検討委員会を充実させ、学習会が開催されることを希望する。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今後も虐待について学ぶ必要があるが虐待の意味と方針を理解しながらケアをおこなっている。	虐待の事例はないが、グレーゾーンにあたるケアが見られ、検討したこともある。管理者はどんな行為が虐待にあたるのか、具体的な例をあげての学習の場の必要性を感じている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際利用している利用者はいないがポスターなどを掲示している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	相談、申し込みを受け契約を結ぶときまでには実態調査、管理者との面談などを通して説明し利用していただくことになっている。解約に関しても相談を受けるなど実施している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族の要望や意見などに対する訴えには十分に対応している。また外部の苦情相談を窓口にはポスターを掲示している。	家族と面談を行った際や電話等で、意見・要望を聞いている。家族からの意見は連絡ノートを通じ、職員ミーティングの際に全職員で情報共有している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回開かれる経営運営会議では理事長、施設長、管理者と各ユニットリーダー、各事業所のリーダーが出席し各事業所の運営に関する報告と意見交換を行っている。	職員はミーティングの際に、日々のケアの中から生まれる問題、気づき、提案を出し合って検討しケアの質の向上に繋げている。管理者はその都度、職員が抱えてる問題や悩みについて必要に応じて答えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働き方、労働時間の見直しを行った。それに伴い代表者は職員の個々に見合った給与の改定を行ってくださる。		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍の影響により今年度の法人内外の研修は実施できていない。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	コロナ禍の影響により南ブロックやGH協をはじめとする集会や研修には参加できていない。	コロナ禍のため、他の事業所との交流の機会ができなくなっている。以前の交流では、人材不足の中での職員の勤務体制作りなどを学んだ。法人内の他事業所とは、事例発表学習会などで交流を続け、事業所の運営改善に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には必ず実態調査を行い利用される方のバックグラウンドや本人の困っていること、希望することなどの情報をできる限り多く把握するように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談を受け実態調査、入居の説明、契約の取り交わしなどを通じて話し合いをしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談時にはケアマネジャーに相談することや敷地内にある老人保健施設などを紹介するなど各々のサービスがあることを説明している。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフは常に利用者と一緒に過ごしているが監視的、管理的にならず必要以外は手をかけず本人のライフスタイルを見守る体制でスタッフが存在するように努めている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	3ヶ月に1度の家族面談や面会時には近況報告とケアプランの内容などをお話しており本人の現状を把握していただいている。また家族に協力を求めることもあり家族の存在の重要性を理解していただいている。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の影響で面会の機会は減少しているが徹底した感染対策のうえ短時間での面会ではあるが面会を喜ばれている。また携帯電話をお持ちの方は家族や知人と電話で話を楽しまれている。	コロナ禍により面会を制限してきたが、12月より制限を緩和し、感染対策を徹底し短時間での面会を再開している。面会等で入居者の表情が明るく良くなり、記憶が蘇って来た状況を踏まえ、馴染みの人との関係継続の必要性の大切さを再認識し、状況をみながら支援継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士居室へ誘ったり洗濯物をたたむときなどお互い声を掛け合っている。また利用者同士が相談を受け親身になって話を聞いてくださっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後であっても相談や情報の提供、アドバイスをするよう努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人本位になるようにバックグラウンドを十分に把握し不明な点は家族から聞き対応に活かしている。	「入居者の言葉に耳を傾ける」と掲げているホーム理念を実現すべく、入居者の声・つぶやき等を職員が丹念に「ケア記録」に記録している。得た情報を職員間で共有し、想いの把握に努め、入居者に寄り添った支援に繋げている。「急がず、焦らず」入居者の声を聴いている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実態調査の時や入居後本人や家族から色々な機会にお話を聞くことができる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日勤、夜勤の申し送りを実施することで一人一人の心身の状態を把握し注意しなければならないことやケアポイントを中心に対応している。また医師への医療的相談、施設長への定時報告を行っている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ANY会議、メサイア会議、ケアプラン検討会、家族面談を通じて家族、医師、施設長、スタッフなどの意見を集めケアプランを作成している。	入居者の日々のケア等を記録した「ケース記録」や家族からの意見を踏まえ、担当職員が中心となって介護計画を作成している。定期的にモニタリングを行い、介護計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は日中、夜間と色分けに書いているほかヒヤリハットな出来事があればその記録を丸で囲むなど今後の事故やケガの防止に努めている。また連絡ノートを活用し気づきなどを記入しケアに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期的な通院は家族にお願いしている。身体レベル低下もあり美容室に行くことが難しい利用者には出張美容師に来てもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	避難訓練は定期的に消防署の指導を受けている。また関連医療機関とは迅速でスムーズな連携が確立されている。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ほとんどの利用者は平田外科をかかりつけ医としているが本人が希望する病院に受診できる支援もっており、その際は情報提供書を作成している。また医師とは24時間連絡をとれる状況にあり迅速な対応をしている。	ほとんどの入居者が協力医をかかりつけ医としている。日々の健康管理は職員が行っている。かかりつけ医とは、24時間連絡が取れる体制が整備されている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	かかりつけ医である平田外科の看護師は協力的で相談しやすい。また緊急時には敷地内の老人保健施設より看護師が駆けつけられる環境にある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	治療が終了した時点で退院の指示があるので実態調査を行い入居が可能と判断できればすぐに退院の方向へ進める。退院後は看護サマリーなどに目を通し不明な点は実態調査のときなどに聞くようにしている。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化したときに家族に今後の方向性について話し合いをする。また重度化すると医療面でのケアが必要になってくる場合があるのでかかりつけ医とはより協力体制を整えている。	グループホームにおいて看取りを行わない、という方針を定めている。ホームに入居の際に、家族へ説明し理解を得ている。重度化し終末期を迎えた時には、グループ法人が運営する老人保健施設や、協力医療機関と連携しながら対応する体制が構築されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命救急は消防署の指導を受けている。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施し非常食の食料や水分、灯油や乾電池、一人一人の内服薬の備蓄品の確認を行っている。避難訓練では区長をはじめ消防団の方たちが応援に駆けつけてくださることになっている。	ハザードマップを事務所に掲示し、職員はその状況を認識し災害に備えている。夜間想定での避難訓練も実施しており、夜間帯の職員体制が2ユニット、2人だけのため、利用者が避難した後の待機時の見守りを近隣住民に依頼している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(16)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者に声をかけるときは敬語で声のトーン、目線、相手との距離に気をつけて話している。また利用者の前で記録をとらないほかスタッフ同士が現場で利用者の話をしないように心がけている。	入居者の尊厳を確保することを、ホームのケアの際の重点項目に位置付け、日常支援の中で、全職員に意識付けを高めている。入居者とは敬語で接し、目線や距離の取り方等にも配慮した支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	必要以外の声掛けや介助は控えるようにし自分で考え行動することを可能な限り尊重している。ご自分からスタッフに「何か剥くものある？」と調理を手伝って下さる方もおられる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できるだけ本人のペースで希望に沿っての支援、スタッフのニーズではなく利用者のニーズに合わせた支援を心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	男性利用者は毎日髭剃りを支援し、女性利用者ではご自身で化粧されている方もおられる。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は利用者の希望を聞き、季節感、旬を心がけながらスタッフが作成する。お正月のおせちやひな祭りをはじめとする行事食は豪華にする工夫をしている。	職員のこだわりにより、メニューはホーム独自で作成し、主食をはじめ主菜・副菜を手作りで提供している。入居者の好みや季節を感じてもらえるような旬の食材、肉・魚が続かないようバランスを考慮し野菜を多く取り入れたメニューになっている。入居者の状態に合わせてミキサー食や刻み食にも対応している。人気メニューはカレーである。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎朝パンを習慣としている方にはパンを提供している。また本人の状態に合わせた食事形態で提供している。水分補給もポカリ、カルピス、麦茶など本人が好むものを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後や就寝前に介助を要する方には口腔ケアをしており清潔保持や誤嚥性の肺炎防止にも努めている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	介助を要する方でも尿意・便意を感じトイレに行っておられる。また排泄のサインを見逃さないようにトイレへ案内することで排泄の失敗を軽減できている。	排泄チェック表を活用し、排泄パターンを把握している。一人ひとりの排泄のサインを見逃さないように努め、その人に合わせた支援を行っている。自立を促すためにも過度な声掛けをしないようにしている。排泄用品もその人の状態に合わせて使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	おやつにはヨーグルトを提供している。また腹部のマッサージや腹部を温めるなどをおこなっている。医師に相談し本人に合った下剤の提供をしている。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は毎日実施しており本人が入りたい時間帯、お湯の温度に合わせて入浴している。また拒否がある方の原因を探り入浴前にお部屋を暖めておくこと拒否が比較的軽減するなど周りの環境も考えて対応している。	入浴は入居者の希望を聞きながら、週2回から3回、15時から18時頃と遅めの時間帯で支援している。入浴拒否がある場合は、原因を探り部屋を温めるなど、入浴環境を整えて声掛けを工夫し入浴に繋がるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後臥床を好まれる方には午睡を習慣としているほか体調によって臥床を好まれる方にはその都度休んでいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局より毎回薬の効能がついているので理解している。症状の変化により薬の内容の変更を医師に相談することもある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の日課で利用者全員でラジオ体操を行うほか皆様が楽しめるレクリエーションや散歩などを行っている。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設周辺を散歩したり気分転換も兼ねてドライブに行くことや桜見ドライブ、新緑ドライブ、紅葉ドライブなどの行事も楽しんでいる。	コロナ禍以前は、年間外出計画に基づいて出掛けていた。現在は感染予防を徹底し、近所を外気浴しながら散歩したり、その日の状況を見ながら支援している。自宅に戻ることを希望する入居者もいる。気分転換を兼ねてドライブを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金をご自身の財布で管理している方もおられる。本人の希望に沿って買い物ができるように支援していく。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人宛の手紙は直接本人に渡して見ていただいている。またご自身の携帯電話で家族や知人とお話されている方もおられる。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	エアコンやヒーター、サーキュレーター、扇風機、加湿器、除湿機、空気清浄機や自然の風を上手に使い分け温度計、湿度計を複数の場所に設置するなどの環境設定を行っている。また行事や季節に合わせたものを飾っている。	リビングは静かな空間になるよう心掛けている。みんなで楽しく過ごす場面と、一人静かに過ごしたい時に合わせられるよう、それぞれ場所を設けている。入居者から希望を聞いて、模様替えをし気分転換を図っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ワンフロアを家具で仕切り食事をする所とテレビを見たり洗濯物をたたんだり、レクリエーションをする所と分けて使用している。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れたテレビや家具などを持ち込み自宅の再現を図りながら居室づくりを行い居心地の良い環境設定を工夫している。	エアコン、ベッド、洗面台、チェストを備え付けている。居室のレイアウトは、入居時、ファミリー面談後や介護度が上がった時など、入居者の動線に配慮し、家族と話し合い決めている。自分の部屋らしくするため入居者の声を大切にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内ほとんどがバリアフリーとなっているほかほとんどの場所には手すりが設置されており手すりがない箇所は家具などをレイアウトし手すり代わりにしている。		